

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

K-19

2002 (平成14) 年10月2日鑑賞
＜試写会＞

Data

監督：キャスリン・ビグロー

出演：ハリソン・フォード／リーア
ム・ニーソン／ピーター・サ
ースガード

👁️👁️ みどころ

米ソ冷戦時代の1961年7月。処女航海中のソ連の原子力潜水艦K-19はミサイルの発射テストには成功したが、原子炉に故障が発生。冷却水の漏れを防がなければ、原子炉は加熱し艦は爆発、大惨事だ。そしてミサイルの暴発は、米ソの全面核戦争の序曲となるだろう。そんな中、祖国に忠実で鉄の意思を持ったハリソン・フォード演ずる艦長がとった行動は……。被爆覚悟で原子炉の隔室での修理に当たる乗組員の姿には心をうたれるが、悲惨でとても見ていられない気持ち。「原子炉の故障」というテーマは、今の日本でも重要問題。緊張感を途切れさせない好作品だ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

＜緊張感溢れるミサイル発射！＞

最初に、「この物語は1961年におこった実話である」という字幕が流れる。続いてスクリーンは、ソ連が誇る原子力潜水艦「K-19」の中。ポレーニン艦長（リーアム・ニーソン）の指揮の下、アメリカに向けてミサイルを発射する場面だ。次々とスイッチが押され、いよいよ発射秒読み。これが発射されたら米ソの全面戦争へ突入だ。そしてミサイルは発射……。されたはずだった。ところが何と言うことか！機器の故障のため発射は失敗……。大失態だ。ところが実は、これは実践ではなく、ミサイルの発射訓練だった。

画面は、K-19の艦内から、次第に遠写しになっていく。すると……。何とK-19はまだ航行していない。ドックの中で、完成に向けての最後の作業中だ。つまりポレーニン艦長以下の乗組員は、この状況下で、訓練をしていたわけだ。

＜ハリソン・フォード艦長の登場＞

しかし、訓練中であってもミサイルの発射に失敗したという事実は重大だ。ポレーニン艦長は、発射装置機器の故障やK-19の未完成を主張するが、アタマの固いソ連指導部はこれを却下。艦長の資質の問題と判断し、実戦配置の準備としての処女航海の艦長には、新しくボストリコフ（ハリソン・フォード）を指名した。アメリカの代表的ハリウッド俳優であるハリソン・フォードが、何と、1960年代の米ソ冷戦時代、一触即発の緊張関係の中で、祖国に忠誠を尽くす、厳格なソ連軍人を演じるのだ。K-19の副艦長に「格下げ」されたポレーニンは、不満をもちながらも職務に忠実な軍人としてボストリコフにつかえた。ボストリコフは、K-19の装備の不安や乗組員の熟練度不足を知りつつも、上層部からの命令を忠実に遂行することを宣言した。

<「K-19」の猛訓練、そして発射成功！>

そして1961年6月18日、K-19は出航。しかし出航までにも事故が多発し、何人もが既に死亡した。そのためK-19は、ウィドーマーカー（未亡人製造艦）と呼ばれる不吉な艦となっていた。原子力潜水艦の心臓部は原子炉。もしここに故障がおこれば、ミサイルの発射ができないことはもちろん、艦自体が爆発してしまう。そしてそうなれば、ミサイルの暴発をはじめとして、とてつもない核爆発がおこり、一面は放射能におおわれる大惨事になることは確実だ。

日本でも最近、東京電力をはじめとして原子力発電所の原子炉の老朽化、ひびわれ問題が発生しているが、これがきちんと報告されず隠ぺいされていたという大問題がおこっていることを考えれば、K-19で現実に起こった原子炉の故障は他人事ではないことがよくわかる。

祖国の命令に忠実で、鉄のような意思をもったボストリコフ艦長は、出航以降訓練づけの毎日。

旧日本帝国海軍の、「月月火水木金土」以上の訓練だ。

当時の原子力潜水艦の安全潜航深度は300m。ボストリコフはいきなり300mまでの潜航を命じた。緊張する乗組員たち。結果的には何とかK-19はその水圧に耐えたが、ミシミシという音は不気味。乗組員たちの精神は極限状態だ。そして今度は、そこからの急速浮上。海の上をおおっている氷河を突き破っての命がけの水面への浮上だ。

そしてさらにミサイルの発射テスト。映画の冒頭にあらわれたシーンがくり返される。そして今度は成功した。このボストリコフ艦長の冒険的ともいえるチャレンジで、艦の能力と自分たちの能力に自信をもった乗組員たちは、氷河の上でボール遊びをし、束の間の休息をとった。この氷河の上で撮影した記念写真には当然乗組員全員が写っていたが・・・。

<原子炉に故障—加熱が止まらなければ・・・>

ミサイルの発射テストに成功したK-19には、次の任務が与えられ、アメリカの海岸線へ接近。ところが、いいことは続かないもの。K-19の原子炉の冷却装置に故障が発生した。冷却装置に漏れが生じ、冷却装置が十分に作動しなくなったため、原子炉が加熱しはじめたのだ。この温度が1000度に達すれば、炉心は溶けてしまい、大爆発の惨事となる。アメリカの海岸線近くで、ソ連の原子力潜水艦が爆発し、ミサイルが暴発したらどうなるか？

当然アメリカはソ連の先制攻撃と断定し、報復攻撃だ。そして世界は核戦争のつぼとなること間違いなしだ。

原子炉の故障を修理する方法に知恵をしぼる士官たち。しかしここでマニュアル本は何の役にもたななかった。そんな中1つの提案が。それは冷却装置のひびわれを溶接作業でつなぎ、船に積んである飲料水をあらたに冷却水として使用するという案だ。

しかしそのためには、人間が原子炉の隔室に入って、作業をしなければならぬ。隔室の中には当然放射能が・・・。

＜被爆覚悟での壮絶な修理作業＞

隔室の中での放射能の被爆が人間にどんな影響を与えるのか？そんな事は誰も経験したことがないから誰にもわからない。しかし、健康や命に影響を与えることは間違いはない。

そこでボストリコフ艦長が下した結論は・・・。

作業班は2人ずつ、10分間の時間厳守で交代で隔室に入り、作業をするというものだ。放射能の被爆を防ぐための防護服や酸素マスクもロクな物は積まれていなかった。何と防護服はレインコートと同じ程度のゴマカシ物だった！

何という恐ろしい局面だろう。しかしそれでもボストリコフ艦長の命令は忠実に実行された。最初のチームの2人は、作業が終わって出てくる時には、息も絶え絶えで、ただ這うだけの状態となっていた。嘔吐もひどいし、既に皮膚には放射能被爆の影響が・・・。

こんな中で次々と作業が進む。淡々と描かれるこの修理作業の場面は見ていっただけで涙が溢れてくる。一体この作業は何のために、誰のためにやっているのか？浮上して救助を求めることは許されないのか？艦を守ること、国を守るとはそれほど大切なのか？もちろんボストリコフ艦長以下全員が、このような心の葛藤と闘いながら生命がけの原子炉修理作業に挑んでいるはずだ。

そして、この作業中にもさまざまな人間ドラマが展開される。ある人はあまりの恐ろしさに任務を拒否、ある人はそれを見かねて自ら隔室の中へ……。彼は「英雄」と称賛されるが、果たしてその価値は・・・？そして修繕作業は成功した。安堵する乗組員たち。しかし、その後傷ついたK-19をどう動かすのか、意見は対立する。しかも無線の故障のため、ソ連本国の指導部とも連絡がとれなくなってしまっていた。

<K-19の運命は・・・>

映画はその後も次々と見せ場が展開される。しかしこれ以上のストーリーの紹介は不要だろう。

この映画で描かれる2つの人間ドラマは、第1にK-19の任務遂行をめぐるボストリコフとポレーニンの葛藤を中心とした指導者としての人間ドラマであり、第2に故障した原子炉を修理する中で展開される乗組員たちの人間ドラマだ。その緊張感はずごい。そして、放射能に被爆しながら原子炉の修繕に生命をかける乗組員たちの姿を、何人も何人も目の当たりにするすごさは言いようがないものだ。

<もしも・・・だったら？>

もし1961年7月4日、このK-19が原子炉の故障で爆発していたら……。これは、「もしクレオパトラの鼻がもう少し低かったら」という仮定と同じような仮定だろうか……。それとも……？

2002（平成14）年10月7日記